



日本植物分類学会 ニュースレター

No. 80

Feb. 2021

今号のトピックス

学会賞，奨励賞，論文賞が決定いたしました（4～5ページ）

名誉会員の推薦をお願いいたします（22ページ）

目 次

会長あいさつ	2
新評議員あいさつ	2
新役員等一覧	3
諸報告	
2021年度第20回日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）	
受賞者の決定	4
2021年度第15回日本植物分類学会論文賞の決定	5
2020年度第1回メール評議員会議事抄録	6
2021年度第1回評議員会議事抄録	7
2020年度日本植物分類学会講演会の報告	9
日本植物分類学会講演会に参加して	9
はじめての植物分類学会講演会	10
「気象庁による生物季節観測の変更の見直しを求める要望書」提出	10
お知らせ	
2021年度総会のお知らせと審議事項	12
東京大学植物標本室（総合研究博物館分室）再開のご連絡	21
植物関連雑誌のタイトル紹介	21
名誉会員推薦のお願い	22
書評	23
会員消息	24

会長あいさつ

会長 村上 哲明 (東京都立大学 牧野標本館)

この度、学会長に新たに選出されましたので、ご挨拶をさせていただきます。

恩師の岩槻邦男先生、私が東京大学理学部附属植物園(当時)の助手時代に直属の上司であった加藤雅啓さんと邑田仁さん、京都大学理学研究科の助教授時代に上司であった戸部博さんが日本植物分類学会の会長として、その発展のために尽力されていたのは私もしっかり拝見しておりました。その重責が私のところに回ってきたと言うことで、身の引き締まる思いであります。微力ながら、本学会の発展のために私も精一杯尽力するつもりでありますので、この2年間、どうかよろしくお願いします。

さて、日本植物分類学会が他の多くの学会と異なっているのは、職業研究者とその卵(学生、院生など)だけでなく、非職業研究者や植物愛好家も多数、正会員となっておられることです。職業研究者よりも広範かつ深淵な植物の知識をもっておられる非職業研究者の会員もいらっしゃいます。日本には、故・牧野富太郎博士の時代から、職業研究者と非職業研究者・植物愛好家が力を合わせて、日本の植物の多様性を解明して来た長い歴史があります。このような良き伝統は是非とも守っていきたくです。多様な会員が楽しめる学会であり続けることは、本学会の最重要課題です。そのため、野外研修会、一般向けの講演会(大会時の公開講演会も含む)、そして英文誌のみならず和文誌も本学会にとって非常に重要であると認識しております。地域の自然史系博物館などとも密に連携をして、植物を知ることを楽しんでいただく事業をしっかりと展開していきます。

一方で、現在、本学会の会員が行っている研究は、系統分類学分野だけに留まらず、系統地理学、生態学(植物と昆虫や菌類との共生なども含む)、保全生物学、さらには進化生物学といった幅広い分野にまで及んでいます。また、植物と言っても陸上植物だけではなく、藻類や高等菌類(キノコ類)を研究対象にしている会員も少なからずおられます。植物(広義)を中心にして、まさに多様な研究がおこなわれているのが本学会です。本学会で行われている研究そのものが、現在の「日本の植物分類学」であると私は考えています。

研究手法もどんどん変化しています。30年ほど前に使われ始めたDNA情報を活用した分類学の研究手法は、今では普通の手法となり、さらに野生植物種的全ゲノム情報を解読・比較するような研究も会員によって始められています。特に若手会員の皆さんには、どんどん新しい研究にチャレンジしていただきたいですし、それをしっかり後押しできるような学会でありたいと思っています。現在、地球上の生物多様性は急速に失われつつあります。植物多様性に関する研究を加速させて、適切な保全のために必要な知見をタイムリーに一般社会に提供することも本学会の重要な使命の1つだと考えます。

最後に、2021年3月の年次大会はオンライン開催となってしまいました。新型コロナウイルスの感染が治まって、本学会の様々な事業で会員の皆様に直接お目にかかれる時が少しでも早く訪れることを祈念しております。くれぐれも健康に気をつけてお過ごし下さい。

新評議員あいさつ

評議員 池田博、海老原淳、黒沢高秀、高野温子、田中伸幸、田村実、坪田博美、仲田崇志、永益英敏、布施静香、山田敏弘、綿野泰行

2021年1月から2年間、新たな12名のメンバーが評議員を務めて参ります。どうぞよろしくお願いします。新型コロナウイルス感染拡大の影響で、本学会の活動も昨年以来大きな影響を受けており、オンラインへシフトした事業も展開されているところですが、会員の皆様が必要とされているサービスが的確に提供されるよう、常時会務への助言等を行っていく所存です。学会の活動に関するご意見・ご要望がございましたら、お近くの評議員までお伝えください。

新役員等一覧 (任期：2021年1月1日～2022年12月31日)

庶務幹事 西野貴子

今期の役員、および、各委員会委員長と委員を下にご報告いたします。

会長	村上 哲明	
庶務幹事 *	西野 貴子	
会計幹事 *	國府方 吾郎	
図書幹事 *	藤井 俊夫	
ニュースレター担当幹事 *	山本 薫	
ホームページ担当幹事 *	阪口 翔太	
編集委員長	田村 実	
英文誌編集責任	田村 実	
和文誌編集長	山田 敏弘	
和文誌副編集長	厚井 聡	
日本分類学会連合担当委員	黒沢 高秀	
自然史学会連合担当委員	朝川 毅守	
講演会担当委員	高山 浩司	
野外研修会担当委員	鈴木 武	* 会則第 11 条で定める幹事 (連続二期まで)

評議員：池田 博，海老原 淳，黒沢 高秀，高野 温子，田中 伸幸，田村 実，坪田 博美，仲田 崇志，永益 英敏，布施 静香，山田 敏弘，綿野 泰行 (五十音順)

監事：池田 啓，渡邊 幹男 (2021 年度の総会まで)

編集委員会：田村 実 (編集委員長・英文誌編集責任)，山田 敏弘 (和文誌編集長)，厚井 聡 (和文誌副編集長)，東 隆行，池田 啓，池田 博，海老原 淳，大村 嘉人，川窪 伸光，黒沢 高秀，高山 浩司，田中 伸幸，坪田 博美，内貴 章世，仲田 崇志，永益 英敏，西田 佐知子，西田 治文，藤井 伸二，布施 静香，牧 雅之，村上 哲明，米倉 浩司，綿野 泰行，David E. Boufford (アメリカ)，Jae-Hong Pak (韓国)，Rachun Pooma (タイ)，Yong-Ping Yang (中国)

絶滅危惧植物専門第一委員会：藤井 伸二 (委員長)，東 隆行，海老原 淳，勝山 輝男，加藤 英寿，角野 康郎，川窪 伸光，黒沢 高秀，志賀 隆，芹沢 俊介，高宮 正之，藤田 卓，矢原 徹一，横田 昌嗣，米倉 浩司

絶滅危惧植物専門第二委員会：細矢 剛 (委員長)，樋口 正信，山口 富美夫，古木 達郎，有川 智己，片桐 知之，北山 太樹，坂山 英俊，菊地 則雄，寺田 竜太，神谷 充伸，細矢 剛，服部 力，吹春 俊光，糟谷 大河，保坂 健太郎，柏谷 博之，宮脇 博巳，竹下 俊治，大村 嘉人

植物データベース専門委員会：大西 亘 (委員長)，伊藤 元己，海老原 淳，永益 英敏，藤井 伸二，米倉 浩司

学会賞選考委員会：瀬戸口 浩彰 (委員長)

ABS 問題対応委員会：村上 哲明 (委員長)，伊藤 元己，海老原 淳，永益 英敏，坪田 博美，藤井 伸二，邑田 仁

国際シンポジウム準備委員会：池田 博 (委員長)

標本問題対応委員会：田中 伸幸 (委員長)，秋山 弘之，池田 博，田金 秀一郎，細矢 剛，永益 英敏，遊川 知久

研究・普及推進委員会：黒沢 高秀（委員長），海老原 淳，大西 亘，角野 康郎，志賀 隆，首藤 光太郎，末次健司，田金 秀一郎，根本 秀一，早川 宗志，藤井 伸二，横川 昌史

諸報告

2021 年度第 20 回日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）受賞者の決定

学会賞選考委員会委員長 瀬戸口 浩彰

本年度の学会賞と奨励賞については推薦のみが集まりました。学会賞選考委員会にて推薦人やご本人に提出頂いた書類に加えて、データベースから選考委員会で独自に収集した研究論文情報等も併用して協議を行い、委員全員の意見の一致に至るまで協議を重ねました。その結果、下記のように学会賞と奨励賞についてそれぞれ 2 名の方を選出して敬意を表することを会長に上申しました。

学会賞 堀江健二氏（旭川市北邦野草園 園長）

「北海道の蛇紋岩地帯における植物の調査・研究」

田村実氏（京都大学大学院理学研究科教授）

「単子葉植物の系統分類学」

奨励賞 片山なつ氏（千葉大学大学院 理学研究院 日本学術振興会特別研究員）

「水生植物カワゴケソウ科の形態進化と多様化過程の研究」

藤原泰央氏（中国科学院 西双版纳植物園 ポスドク研究員 Postdoctoral researcher）

「シダ植物における倍数体進化の研究と倍数性複合体の分類学的整理」

授賞理由は以下の通りです。

学会賞：

堀江健二氏は、北海道を中心として維管束植物の分類や分布の研究を続けられ、当地の植物相の解明に大きく貢献されました。とくに蛇紋岩地帯のフロラ研究では 7 種の固有植物を発見されたほか、蛇紋岩地帯・石灰岩地帯のフロラを地域ごとに解析し、植物地理学的観点から研究論文にまとめています。またニッケル集積植物の特定や非蛇紋岩地帯の植物との比較解析で成果を挙げられ、39 報の論文として出版されています。フロラ研究においても 4 万点以上の貴重な標本を国立科学博物館や東京大学、旭川市北邦野草園などに収蔵し、貴重な資料となっています。また、絶滅危惧種調査や環境省の希少野生動植物種保存推進委員として尽力されてきたとともに、市民への普及活動や大学等の研究機関の調査にも関わってこられました。

田村実氏は、単子葉植物の系統分類学の研究を長年に渡って推進し、現在用いられている APG III における単子葉植物の分類体系の策定においても国際的な枠組みのなかで貢献されてきました。日本における単子葉植物の系統分類についての貢献は国内の会員も良く知るところですが、タイ（Flora of Thailand）や中国（Flora of China）などの国外においても重要な貢献をしています。日本植物分類学会の活動についても、評議員や第 16 回日本植物分類学会京都大会の大会会長、そして皆様もよくご存じのように本学会の英文誌である Acta Phytotaxonomica et Geobotanica の編集委員長を 8 年間も務められ、安定的な出版の実現を進めることによって Impact Factor の付与も実現することになりました。

このように、上記のお二人は、植物分類学および日本植物分類学会の発展に特に顕著な貢献があったと認められましたので、その深い功績を称えて敬意を表し、日本植物分類学会賞の授与を会長に報告をさせて頂きました。

奨励賞：

片山なつ氏は、カワゴケソウという生育環境に極めて特殊な適応進化を遂げた植物を題材に、その特殊形態が作られる過程を形態学的に詳細に解明して、ボディプランの作られ方を明らかにしました。また最近ではその背景にある遺伝子の作用についても研究を発展させています。発表に用いられた形態写真は良く吟味された精緻なもので説得力に富み、論文内容の完成度も高いレベルであり、今後の研究展開が大いに期待されることにおいて選考委員の間で意見が一致しました。

藤原泰央氏は、葉緑体 DNA やゲノムのシングルコピー遺伝子の分子マーカーを駆使してシダ植物の雑種起源や雑種の複数回起源を明らかにしています。また、系統地理構造についての解析も進めています。最近の研究活動はめざましく、例えばウラボシ科のノキシノブ属を対象にした研究を日本列島や中国において次々と完成させています。これらの論文における解析結果の精度や内容の完成度が高いことが審査員の間で一致した見解になりました。

このように、上記のお二人は優れた研究業績をあげた将来有望な若手研究者であり、その功績を高く評価し、日本植物分類学会奨励賞の授与を会長に上申しました。

2021 年度第 15 回日本植物分類学会論文賞の決定

論文賞選考委員会委員長 田村 実

2021 年度第 15 回日本植物分類学会論文賞は、2020 年に出版された英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』71 巻および和文誌『植物地理・分類研究』68 巻に掲載された論文のうち、編集委員および論文賞選考委員から推薦された論文 8 編を論文賞選考委員会において審査し、次の 2 論文に決定しました。

Mase, K., S. Tagane, P. Chhang and T. Yahara. 2020. A taxonomic study of *Machilus* (Lauraceae) in Cambodia based on DNA barcodes and morphological observations. *Acta Phytotax. Geobot.* 71(2): 79-101.

選考理由：東南アジアでは、クスノキ科は花をあまり咲かせない上、高木になるものが多く、標本の蓄積が進んでいない分類群である。また、植物誌での整理も進んでおらず同定は難しい。一方で、種数が多く常緑広葉樹林の優占種にもなるため、分類学的研究が急がれる分類群の 1 つである。本論文は、カンボジアのタブノキ属（クスノキ科）について、*rbcl*, *matK*, ITS の塩基配列と葉、若枝、頂芽の栄養器官の形質に基づいて 6 種を認識し、4 新種を提案している。生殖器官を確認する前段階での記載であることや、筆者らの研究チームが採集した植物の標本以外は未検討であることには、いろいろな受け取り方があるだろう。しかし、東南アジアの植物分類研究の加速化を重視して、花を見ることができない状況下で、しかも葉での識別形質に乏しいタブノキ属において、種を認識し、記載にまでこぎ着け、検索表をも作成した成果は高く評価できる。

Noda, H., J. Yamashita, S. Fuse, R. Pooma, M. Poopath, H. Tobe and M. N. Tamura. 2020. A large-scale phylogenetic analysis of *Dioscorea* (Dioscoreaceae), with reference to character evolution and subgeneric recognition. *Acta Phytotax. Geobot.* 71(2): 103-128.

選考理由：本論文は、雌雄異株のつる植物で、世界の熱帯域を中心に広く分布する同定困難なヤマノイモ属を対象にして、183 種を取り扱った大規模な分子系統樹を構築しているところに意義がある。大規模分子系統樹であるがゆえに、既存の形態ベースの節認識の妥当性を系統の観点から評価できている。また、形態観察では、つる植物にとって確認の難しい地下茎や、雄株と雌株の両方を正確に同定しないと対応付けが難しい花粉や果実・種子などの形態も取り扱って、それらの形質進化を詳細に推定している。そして、これまで誰も成し遂げられていない分子系統を反映させたヤマノイモ属の節認識を行うための基盤を形成した点が高く評価できる。

2020 年度第 1 回メール評議員会議事抄録

前庶務幹事 海老原 淳

2020 年 12 月 7 日～12 月 28 日に 2020 年度第 1 回メール評議員会が開催されましたので、議事抄録を報告します。この会議は 2020 年度の事業報告案と会計決算案を評議員の方々に審議していただくものです。加えて、今回は、会計幹事の交代に伴う学会の所在地の変更のため、会則の学会所在地の変更案をご審議いただくと共に、2021 年 3 月の総会の総会に提案予定の会則変更案（2 件）をご審議いただきました。会則第 22 条の学会所在地の変更は、第 21 条「この会則は、総会において出席者の 3 分の 2 以上の同意を得て変更できる。ただし、第 22 条の本会の所在地については評議員会の承認をもって変更できる。」に基づき、会計口座の住所変更手続きなどに必要なため、本メール評議員会の承認をもって、1 月 1 日より変更いたしました。

開催日時：2020 年 12 月 7 日～12 月 28 日

開催方法：電子メール媒体を用いた会議

参加者：評議員全員

議長選出：慣例にしたがい伊藤元己前会長を議長とすることに反対はなかった。

1. 審議事項

第 1 号議案 2020 年度事業報告案

第 2 号議案 2020 年度決算案

第 3 号議案 2020 年度会則変更案

2021 年度より会計幹事の交代に伴い、学会所在地の変更が必要になったため、第 22 条を下記のとおり改定する。

	旧	新
第 22 条	本会の所在地は <u>大阪府交野市私市 2000</u> とする。	第 22 条 本会の所在地は <u>茨城県つくば市天久保 4-1-1</u> とする。
附則	本会則は 2019 年 1 月 1 日より実施する。	附則 本会則は 2019 年 1 月 1 日より実施する。
		附則 本会則は 2021 年 1 月 1 日より実施する。

第 4 号議案 2021 年度総会における会則変更案

第 5 号議案 2021 年度総会における会則変更案

→ 第 3 号議案を除いて、2021 年度総会議案と重複するため、掲載を省略させていただきます。総会議案（12 ページ）をご参照ください。

2. 審議結果

第 1 号～第 4 号議案は、提案通り承認され、修正はなかった。第 5 号議案については、修正の後、承認多数で可決された。委任状はなかったが、白票扱いが 2 票であった。

第 1 号議案 【賛成 11 票，反対 0 票，白票 2 票】

第 2 号議案 【賛成 11 票，反対 0 票，白票 2 票】

第 3 号議案 【賛成 11 票，反対 0 票，白票 2 票】

第 4 号議案 【賛成 11 票，反対 0 票，白票 2 票】

第 5 号議案 【賛成 11 票，反対 0 票，白票 2 票】

3. 議事録署名人

議事録署名人として西田 佐知子氏と綿野 泰行氏が選出された。

2021 年度第 1 回評議委員会議事抄録

庶務幹事 西野 貴子

3月のオンライン総会に先立ち、例年とは大幅に異なる日程での評議委員会を開催しました。総会の審議事項に関して、ニュースレターでの周知をはかり、オフラインの会員の方々からもご意見をいただくために、前倒しの日取りで行われたものであることを申し添えます。

会場：ウェブ会議システムを用いた開催

日時：2021年1月12日（火）17時～20時30分

参加者：評議員 総勢 12名

出席 [12名]：池田 博，海老原 淳，黒沢 高秀，高野 温子，田中 伸幸，田村 実，坪田 博美，仲田 崇志，永益 英敏，布施 静香，山田 敏弘，綿野 泰行

欠席：なし

幹事会・委員会委員長：() 内は役職

出席 [18名]：村上 哲明 (会長, ABS 問題対応委員会委員長), 西野 貴子 (庶務), 國府方 吾郎 (会計), 阪口翔太 (ホームページ), 藤井 俊夫 (図書), 山本 薫 (ニュースレター), 田村 実 (編集委員長・英文誌編集責任), 山田 敏弘 (和文誌編集長), 厚井 聡 (和文誌副編集長), 黒沢 高秀 (日本分類学会連合, 研究・普及推進委員会委員長), 朝川 毅守 (自然史学会連合), 高山 浩司 (講演会), 鈴木 武 (野外研修会), 藤井 伸二 (絶滅危惧植物専門第一委員会委員長), 細矢 剛 (絶滅危惧植物専門第二委員会委員長), 大西 亘 (植物データベース専門委員会委員長), 池田 博 (国際シンポジウム準備委員会委員長), 田中 伸幸 (標本問題対応委員会委員長)

欠席 [1名]：瀬戸口浩彰 (学会賞選考委員長)

1. 評議委員会開催にあたり、村上哲明会長から挨拶があった。
2. 庶務幹事により定足数が確認された。会長、評議員 13 名出席、欠席なしにより評議委員会は成立した。
3. 評議委員会議長として田中 伸幸氏、議事録署名人として議長に加え、海老原 淳氏、仲田 崇志氏が選出された。

4. 報告事項

- 4.1. 自然史学会連合関連報告 2020 年度活動報告および 2021 年度活動計画の説明がなされた。
- 4.2. 日本分類学会連合報告 2020 年度活動報告および 2021 年度活動計画の説明がなされた。
- 4.3. 各種委員会に関する報告がなされた。

- (1) 編集委員会 英文誌『APG』および和文誌『植物地理・分類研究』の昨年度編集状況、および 2021 年度出版計画について説明。
- (2) 学会賞選考委員会 日本植物分類学会賞の選考経過の説明。
- (3) 論文賞選考委員会 日本植物分類学会論文賞の選考経過の説明。
- (4) 植物データベース専門委員会 活動報告。
- (5) 絶滅危惧植物専門第一委員会 環境省第 5 次レッドリスト改定にむけた作業の現状説明と活動報告。
- (6) 絶滅危惧植物専門第二委員会 同上。
- (7) ABS 問題対応委員会 文科省 (AMED) からの予算を用いて本学会会員の ABS 対応への支援を実施したこと、引き続き環境省への許可申請についての要望の主張を継続。
- (8) 国際シンポジウム準備委員会 2021 年度はオンラインでの開催を検討。
- (9) 標本問題対応委員会 農林水産省との協議により、乾燥植物標本を検疫対象外とし、輸入時に検査証明書を要しない物品とする植物防疫法施行規則 (省令) の一部改正案が官報公示・施行

されたこと、そして、Index Herbariorum 事務局（ニューヨーク植物園ハーバリウム）へはその旨を通知し、日本のハーバリウムへの標本送付には検査証明書が必要とする注意事項が削除されたことの説明。

(10) 研究・普及推進委員会 岐阜大会の現地開催の中止に伴い、閲覧の機会がなくなった植物誌の活用の検討。

4.4. 図書関連報告 寄贈雑誌・交換状況、バックナンバーの販売状況の説明がなされた。

4.5. ニュースレターに関する報告 2020 年度実施報告、および 2021 年度準備状況の説明がなされた。

4.6. ホームページ・メールニュース関連報告 学会公式 HP およびメールニュースの運用状況の説明がなされた。

4.7. 会務報告

2020 年度の事業報告がなされた。

4.8. 会計報告

2020 年度の会員状況、会費滞納者の状況の説明がなされた。

4.9. その他

(1) 講演会報告 2020 年度の講演会の実施について報告がなされた。

(2) 野外研修会について 2020 年実施報告、および、2021 年度準備状況について説明がなされた。

5. 審議事項

5.1. 2020 年度事業報告（案）について

西野庶務幹事より 2020 年度事業報告（案）が提案され、承認された。

5.2. 2020 年度決算報告（案）について

厚井前会計幹事より 2020 年度決算報告（案）が提案され、承認された。

5.3. 2021 年度事業計画（案）について

西野庶務幹事より 2021 年度事業計画（案）が提案され、承認された。

5.4. 2021 年度予算（案）について

國府方会計幹事から 2021 年度予算（案）が提案され、質疑の後、承認された。

5.5. 次期監事の推薦について

『役員等の選出についての細則』第 6 条第 2 項に則り、池田 啓 氏、大村嘉人 氏の 2 名を推薦することが承認された。

5.6. 名誉会員の推薦について

本年度は新規の推薦を見送ることが報告され、自薦・他薦を問わず候補者を広く募り、来年度に推薦を行うことが確認された。

5.7. 除名について

本年度は除名を行わず、会則第 10 条に基づき、除名対象となる会員への滞納会費の督促を継続し、退会に関する会則変更についての総会での審議次第で個々に今後の対応を行うことが確認された。

5.8. 自然史学会連合の共同声明への賛同について

自然史学会連合の共同声明「日本学術会議第 25 期推薦会員任命拒否に関する緊急声明」への賛同が追認された。

6. その他

6.1. 第 21 回大会開催地について

村上会長より、第 21 回大会は神奈川県で開催することが報告された。

6.2. 「屋久島の低地照葉樹林の保全に関する要望書」の合同提出への回答について

海老原前庶務幹事より、「屋久島の低地照葉樹林の保全に関する要望書」の合同提出に対する回答が説明された。

6.3. 「気象庁による生物季節観測の変更の見直しを求める要望書」について

海老原前庶務幹事より、「気象庁による生物季節観測の変更の見直しを求める要望書」の賛同について、評議員より意見があったことが報告された。

6.4 第20回大会（オンライン）の開催について

村会上長兼大会会長より、オンライン大会の概要と実行委員会組織、および日程等についての説明がなされた。

2020年度日本植物分類学会講演会の報告

2020年度講演会担当委員 布施 静香

20回目の日本植物分類学会講演会が、2020年12月19日（土）にZoomを用いたオンラインで開催されました。当初は大阪学院大学での開催を予定していましたが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴ってやむを得ず変更されました。オンラインでの参加方法等の連絡は学会ホームページとAPG 71(3)の同封チラシによって行われ、参加は事前申込制（12月17日締切）としました。北海道～沖縄、中国より合計177名（内訳：学会員一般118名、学会員学生17名、学会員外一般33名、学会員外学生9名）の事前申込があり、その内161名の方が実際に参加されました。通常開催では参加が困難な方にもご参加いただけた一方、オンライン開催になった事でご参加いただけなかった方もいらっしゃるのではないかと思います。

今回は6名の先生方に下記の順でご講演いただきました。

- 李 忠建（京都大学 大学院理学研究科）「ツククサ科植物の世界—系統で見直す多様性と分類」
- 堀 清鷹（高知県立牧野植物園）「シダ植物の無配生生殖種における網状進化の解明と分類学的整理」
- 山本将也（兵庫教育大学 大学院学校教育研究科）「岩に生えるサクラソウの進化史・生態・保全」
- 志賀 隆（新潟大学 人文社会科学系）「モンゴル探訪記：大陸の水草を求めて」
- 綿野泰行（千葉大学 大学院理学研究院）「分子マーカーが描くパターンに耳を傾ける」
- 高橋 弘（岐阜県植物誌調査会・岐阜大学）「植物誌から見てきた岐阜県の植物相における特徴」

ご多忙中にも関わらず快くご講演を引き受けくださった演者の皆様、長時間お付き合いくださった参加者の皆様、質問やコメントで講演会を盛り上げてくださった方々、Zoomシステムのサポートをしてくださった京都大学の高山浩司先生、開催直前まで会場の手配をくださった大阪学院大学の林一彦先生に厚く御礼申し上げます。



ご講演の様子

日本植物分類学会講演会に参加して

林 雅貴（大阪府立大学 生命環境科学域）

本講演会を通して分類や進化、保全など多岐にわたるお話をお伺いすることができ、私自身、分類学についてまだまだ知識不足ではありますが、関心を深める貴重な機会となりました。

まず李先生は、ツククサ科植物についてその多様性や、分子系統解析を用いた分類学的整理についてお話されました。ツククサ科植物では蠟型花序や不稔雄しべなど形態が多様であり複雑に感じましたが、分子系統解析により各形質がそれぞれのクレードに収まり整理される結果を見て感激しました。また、得

られた系統樹から、相称性や総苞などの形質についての変遷を推定されており、とても興味深い内容でした。堀先生は、オシダ属の主に無配生殖種について、網状進化の解明と分類学的整理についてお話しされました。無配生殖種のシダが遺伝的・形態的に多様であり、また、連続性をもつ理由を多角的に示して下さいました。孢子形成のパターンなど基本的な知識から、無配生殖種の進化に関する壮大な仮説まで幅広い内容で、とても勉強になりました。山本先生は、サクラソウ属についてその進化史・生態・保全に関するお話をされました。今回は、サクラソウ属の中でも日本にのみ生育する分類群の起源と系統進化、種分化機構、訪花昆虫や保全など幅広く示して下さいました。情報量の多い内容でしたが、簡潔な説明をして下さり、容易に理解を進められました。特に、北海道の分類群における種分化機構のお話は興味深く、この分野のおもしろさを改めて感じる機会となりました。

最後になりましたが、今年はオンラインでの開催となり例年とは異なる状況にも関わらず、学びを深める場を整えて下さったすべての方々に感謝申し上げます。

初めての植物分類学会講演会

長谷川 佳代 (岐阜大学 大学院 自然科学技術研究科)

植物分類学会に所属してあまり日が長くないこともあり、今回の講演会は、私にとって初めての植物分類学会の講演会となりました。講演者の皆さまに様々なお話をお聞かせいただき、私自身の狭い視野を広げることができました。

すでに見知っている植物種でも、手段を変えると、また違った角度から新鮮な発見があります。今年度の学会賞受賞者の綿野泰行先生には、分子マーカーを通して見える植物の世界をご講演いただきました。一連のお話の中で、私が全く知らなかったハイマツとキタゴヨウの間の遺伝子浸透に大いに興味を抱きました。これからは、ハイマツとキタゴヨウを、今までとはまるで異なった視点で観察できそうです。

知らない土地の話をお聞きするとき、私はいつでもワクワクします。志賀隆先生には、モンゴルを舞台とした海外調査の実態報告をお話いただきました。現地では、悪路を揺れのひどい車で進んだり、タイヤがぬかるみにはまって、ときに1日以上動けなくなったりしたそうです。幾多の困難を乗り越えてモンゴルで出会った水草たちを、志賀先生は愛おしそうに語っておられました。困難はあっても、目的の植物たちに出会ったときの嬉しさは、どんな場所でも変わらないんだな、と思いました。

知らない土地について知らないのは当然です。ところが、私の生まれ育った土地、岐阜県にもまだまだ知らないことがたくさんありました。高橋弘先生には、岐阜県を舞台に植物相の特徴をご講演いただきました。慣れ親しんだ土地の、見たことある植物たちが、驚くほど意外な分布をしていたり、岐阜県では見られないと思っていた植物が実は岐阜県に分布していたりと、私にとって新鮮な発見がいくつもありました。岐阜県で見られる植物たちがますます好きになりました。

今回の講演会は、植物たちの世界をより深く知るまたとない機会でした。ご講演をいただいた先生方、講演会を開催していただいた皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

「気象庁による生物季節観測の変更の見直しを求める要望書」提出

前庶務幹事 海老原 淳

日本植物分類学会は、「気象庁による生物季節観測の変更の見直しを求める要望書」を26学会との連名で気象庁宛に12月23日付で提出しました。要望内容について以下に掲載します。なお、要望書の引用文献・連名とした学会名入りの全文については、日本生態学会のホームページに掲載されておりますので、そちらをご参照ください。

<https://www.esj.ne.jp/esj/Activity/2020Kishoutyou.html>

また、提出時の気象庁との意見交換の内容等は、日本生態学会の会長メッセージとして以下のページでご覧いただけます。

<https://www.esj.ne.jp/esj/message/no0705.html>

気象庁は、1953年以来、全国の気象官署で統一した基準により、植物の開花日、発芽日、紅葉日等について34種目41現象を対象にした植物季節観測を、鳥や昆虫等の初鳴日や初見日について23種目24現象を対象にした動物季節観測を、それぞれ実施してきました。観測された結果は、わたしたちの生活情報のひとつとして利用され、さらに季節の遅れ進みや、気候の違いなど総合的な気象状況の推移を把握することにも用いられ、近年では気候変動が生物や生態系に及ぼす影響の評価にも活用されてきました。しかし、令和3年1月より、6種目9現象の植物のみを対象とした生物季節観測に変更することが、令和2年11月10日付けで気象庁より発表されました。これは、実に67年間にわたり行われてきた、日本の身近な自然を代表する動植物を対象とした観測の多くが中止されることを意味します。しかしながら、観測が中止される観測項目の中には、55か所の気象台において1953年より観察されてきたモンシロチョウの初見日のように、長期間・広範囲にわたり観測されてきた生物種を対象とした現象も少なくありません。このような種目を対象とした生物季節観測の中止は、学術的にも社会的にも大きな損失となることが予想されます。わたしたちは、気象庁が行われてきた生物季節観測について、これまでの結果だけでなく将来にわたる重要性を鑑み、以下の要望をいたします。

これまでの観測発表回数が300回を超えている動物季節観測6種目6現象については、わたしたちの生活情報や文化としての価値、気候変動影響の評価等の学術的・社会的な価値が極めて高いため、令和3年1月以降も継続して観測する項目に戻す等の見直しを行うこと。

動物季節観測については一律に中止するのではなく、地域により対象を絞って継続的に観測することに加え、対象を見つけることが困難となった気象台でのみ観測を中止する等の再考を行うこと。

観測項目変更の見直しの中で、対象を見つけることが特に困難になってきている気象台においては、例えば地域における市民参加型観測体制の導入により観測継続の可能性について検討を行うこと。

近年では気候変動が生物の生存や生態系の成立を脅かす大きな問題になってきています。その気温上昇による影響は広く生物界全般に拡がりつつあり、生物季節や生息域、生物群集の変化を引き起こしていると考えられています。特に、気象庁がこれまで観測してきた生物季節、植物の開花・発芽・紅葉・落葉、動物の出現・鳴き始め等が、ここ30年の気候変動によりすでに大きく変化していることが知られています。例えば、気象庁がこれまで観測してきた生物季節データを使った様々な解析から、開花の早まりや結実の遅れ、開花期間の延長、動物の出現の遅れ等が報告されています。これらの成果の一部は、気候変動に関する政府間パネル第5次評価報告書に引用されるなど、気候変動に関する政府間パネルでの目標設定にも大きく寄与しています。

生物や生態系の長期観察は、多くの生態学、保全生物学的なデータを提供し、特に気候変動に関する多くの知見をもたらし、それによって温室効果ガス排出削減の枠組みや生物多様性国家戦略（愛知目標）などの、国際的な行政指針の策定に多大な貢献をしてきました。日本の生物季節観測データは近年でも、地球規模での生物季節の解析にも用いられ、その価値は国際的にも評価されています。気象庁の生物季節観測は67年にわたり全国統一的な手法で観測が行われており、これらのように大変貴重な長期観察データとして、日本はもとより、海外でも利用されております。今後はさらに気候変動が進む時代になると予想され、その生物季節観測の重要性が増すものと考えられます。

わたしたちは、生物季節観測の事業について、継続することによる多くの科学的知見の蓄積とそれによる政策立案の可能性について十分検討されないまま、多数の項目の中止が検討されている状況を深く憂慮しています。中でも、動物・昆虫の観測がすべて撤廃されることは極めて遺憾で、一般に植物と動物の両

方のデータがそろって初めて理解できる現象が少なからず見られます。また、全国各地にある気象台から約 70 年間集積されたデータの価値は、今後さらに継続的にデータを得ることで、環境変動や季節変動を客観的に捉える上での二度と得られない科学的根拠に基づいた重要な基礎データとなり、将来予測にも必ずや役立てられるものになると確信しています。つまり、これまで長期に渡って継続されてきた、かけがえのない生物調査が廃止されてしまうことは、世界的にも多大な損失に繋がるのです。

わたしたちは生物季節観測の変更に係る見直しについて、必要な情報提供や種目選別作業等に関する協力・支援を惜しみません。また、これらの生物季節観測を継続するための手法として、市民参加型の観測体制の導入等についても、専門家集団として協力をさせて頂く用意がございますことを最後に申し添えます。

以上

お知らせ

2021 年度総会のお知らせと審議事項

庶務幹事 西野 貴子

来たる 3 月 9 日（火）に、集会等のウェブ開催システム（zoom ウェビナー）を用いてのオンライン総会にて、以下の議案が審議されます。会員各位の参加をお願いいたします。総会のみ参加の場合も大会の事前申し込みが必要になりますのでご注意ください。また、オンラインでの参加が難しい場合には、電子メール、ファックス、もしくは郵送にて、下記の庶務幹事宛てに事前にご意見をお寄せください。

庶務幹事連絡先 西野貴子

jimu@e-jsps.com Fax: 072-254-9754

〒 599-8531 堺市中区学園町 1-1 C10 棟 大阪府立大学 大学院理学系研究科

- 第 1 号議案 2020 年度事業報告案（12 ページ参照）
2020 年度決算案（17 ページ参照）
- 第 2 号議案 2021 年度事業計画案（14 ページ参照）
2021 年度予算案（19 ページ参照）
- 第 3 号議案 会員の権利と会費についての細則第 1 条の会則変更案
- 第 4 号議案 会則第 9 条の会則変更案

第 1 号議案 2020 年度事業報告案

(1) 集会等の開催

- ・学術集会，講演会，研修会

年次学術集会（日本植物分類学会第 19 回大会：2 月 29 日～3 月 3 日 岐阜市）を開催したが、新型コロナウイルス感染拡大を考慮して現地開催は中止とした。口頭発表・ポスター発表は要旨集配布によって発表成立として扱った。

2020 年度講演会を開催した（12 月 19 日（土）：zoom を用いたオンライン）。

2020 年度野外研修会は、田金秀一郎氏（鹿児島大）の主催で甕島列島にて秋に開催予定をしていたが中止した。

- ・総会，評議員会

次総会をニュースレター No. 77 誌上で開催した。

評議員会を1回(2月29日 zoom を用いたオンライン)開催した(ニュースレター No. 77 で報告)。

メール評議員会を1回(12月)開催した(ニュースレター No. 80 で報告予定)。

(2) 出版物の刊行

・学会誌の発行

英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第71巻1～3号(計3冊)を発行した。

和文誌『植物地理・分類研究(The Journal of Phytogeography and Taxonomy)』第68巻1～2号(計2冊)を発行した。

・ニュースレター

『日本植物分類学会ニュースレター』76～79号(計4冊)を発行した。

(3) 委員会活動

以下の委員会を組織し、目的に沿って活動を行った。

・絶滅危惧植物専門第一委員会(藤井伸二委員長)

環境省第5次レッドリスト改訂に向け、絶滅確率のシミュレーション計算を約300種類について行うとともに2回の委員会(9/22, 10/29)を開催して判定案を作成し、環境省に提供した。

※全体のスケジュール: 2017～18(現地調査), 2019(補完調査), 2020-21(ランク評価), 2022-23(原稿執筆), 2024(RDB公表)。

・絶滅危惧植物専門第二委員会(樋口正信委員長)

コケ類, 藻類, 菌類, 地衣類のグループごとに今回のレッドリスト見直しから全面的に採用する定量評価方法に係るワークショップを環境省及び自然環境研究センター担当者と実施した。その後, グループごとに開催した分科会で評価対象種とその分担等について議論し, 決定した。定量評価の資料となるチェックシートの一部を年度内に作成する予定である。

・植物データベース専門委員会(大西亘委員長)

国内の植物分類学系学術誌の情報整理を進めた。植物学関連のwebデータベースの情報整理を進めた。

・学会賞選考委員会(瀬戸口浩彰委員長)

第20回日本植物分類学会賞の受賞者4名(学会賞2名, 若手奨励賞2名)を決定した。(ニュースレター No. 80 で報告)

・論文賞選考委員会(田村実委員長)

第15回日本植物分類学会論文賞の2論文(予定)を決定した。(ニュースレター No. 80 で報告)

・ABS問題対応委員会(村上哲明委員長)

委員会全体としての活動は特に行わなかったが, 委員長の村上が文科省(AMED)からの予算を用いて本学会会員のABS対応への支援を実施した。今年度, 日本が国内遺伝資源の提供国措置を導入すること(日本国内に生息する野生生物に対して, 外国人がこれを研究などに利用する場合に, 事前に日本国政府の許可を得ることを新たに要求すること)に関して, 環境省がデルファイ法による複数回アンケート調査を実施した。現在も継続中である。ただ, 日本がそのようにすると, 結局, 我々日本人研究者が国内産の野生植物材料を欧米などの共同研究者に送る際に, その都度, 環境省に許可申請をしてあげないといけなくなる。つまり, 我々の負担が増え, 海外の研究者と協力して推進してきた生物多様性の研究や保全活動が滞るだけである。本委員会では, このことを再度, 環境省に対して強く主張していきたいと考えている。本学会会員の皆さまのご理解・ご協力をいただきたい。

・国際シンポジウム準備委員会(池田博委員長)

2020年度は韓国で開催が予定されていたが, コロナの影響で延期となったため, 特に活動は行っていない。

・標本問題対応委員会(田中伸幸委員長)

NL75号で報告したワシントン条約特定科学施設登録制度の発足により, 同制度の普及のための情報提供を行った。農林水産省との協議を続け, 乾燥植物標本を検疫対象外とし, 輸入時に検査証明書

を要しない物品とする植物防疫法施行規則（省令）の一部改正案が8月上旬に官報公示・施行された。これに伴い植物乾燥標本の輸入には、検索証明書の添付が不要となった。Index Herbariorum 事務局（ニューヨーク植物園ハーバリウム）へはその旨通知し、日本のハーバリウムへの標本送付には検査証明書が必要とする注意事項の削除を依頼し、10月に削除された。

・研究・普及推進委員会（黒沢 高秀委員長）

2019年11月発行の『植物地理・分類研究』に掲載された「植物分類学の将来の発展と普及に関する委員会」の地域植物研究会等の現状に関するアンケートの報告では、地域植物研究会の高齢化の問題や活性化の課題が示され、職業研究者と在野の非職業研究者・愛好家の相互理解と協力が、日本の植物分類学の進展に重要であることが指摘された。それを受けて、植物分類学の研究の推進や一般への普及とともに、これらの課題にも取り組んでゆくこととなった。

第19回大会会場で植物分類学関連学会、研究会、同好会の活動を紹介するための展示コーナーを設置する準備を進めたが、現地開催の中止に伴い中止となった。

(4) 表彰

- ・日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）の授与を行った（ニュースレター No. 76 で報告）。
- ・日本植物分類学会論文賞の授与を行った（ニュースレター No. 76 で報告）。
- ・日本植物分類学会大会発表賞は、大会の現地開催中止に伴い、今年度は授与を行わなかった。

(5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・国内学会連合等への参加・連携を行った：日本学術会議、自然史学会連合、日本分類学会連合など。
- ・The Korean Society of Plant Taxonomists (KSPT), および Taxonomy and Evolution Division, the Botanical Society of China (BSC) 等と連携した。

(6) その他

- ・伊藤会長の代行として、2019年11月1日から2020年4月30日までの6ヶ月間、予め指名のあった藤井評議員が会長代行を務め、評議員会をオンラインにて執り行った。
- ・学会刊行物のバックナンバー等の販売と整理を行った。
- ・当年度発行の『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』と『植物地理・分類研究』の論文PDFをJ-STAGEで公開した。
- ・植物分類学関連情報（学術集会、研究動向、出版物、公募）を収集し、ニュースレター、メールニュース、ホームページ等で提供した。
- ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行った。
- ・webページをリニューアルし、移転した。
- ・会員向けメーリングリストを「メールニュース」へ名称変更し、会員の登録率向上に努めた。
- ・「屋久島の低地照葉樹林の保全を求める要望書」を環境省・林野庁・鹿児島県・屋久島町宛に提出した（ニュースレター No. 77 で報告）。
- ・「気象庁による生物季節観測の変更の見直しを求める要望書」に賛同し、連名で提出した（ニュースレター No. 80 で報告）。

2020年度決算案 → 17ページに掲載

第2号議案 2021年度事業計画案

(1) 集会等の開催

- ・学術集会、講演会、研修会
 年次学術集会（日本植物分類学会第20回大会：3月8日～3月10日 オンライン）を開催する。
 2021年度講演会を開催する。

2021 年度野外研修会を開催する。

- ・ 総会, 評議員会
評議員会を開催する (1 月 12 日)。
年次総会を年次学術集会に合わせて開催する (3 月 9 日)。

(2) 出版物の刊行

- ・ 学会誌の発行
英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第 72 巻 1～3 号 (計 3 冊) を発行する。
和文誌『植物地理・分類研究 (The Journal of Phytogeography and Taxonomy)』第 69 巻 1～2 号 (計 2 冊) を発行する。
- ・ ニュースレター
『日本植物分類学会ニュースレター』80～83 号 (計 4 号) を発行する。

(3) 委員会活動

以下の委員会を組織し, 目的に沿って活動する。

- ・ 絶滅危惧植物専門第一委員会
環境省第 5 次レッドリスト改訂に向け, 絶滅確率のシミュレーション計算を進める。
- ・ 絶滅危惧植物専門第二委員会
コケ類, 藻類, 菌類, 地衣類のグループごとに, 昨年度決定した評価対象種についてレッドリストカテゴリーを判定するためのチェックシートの作成を進める計画である。以後, カテゴリー判定とレッドデータブックの原稿執筆を 2023 年まで行い, 2024 年にレッドリストとレッドデータブックの公表となる予定である。
- ・ 植物データベース専門委員会
国内の植物分類学系学術誌の情報ならびに, 植物学関連の web データベースの情報整理を進める。これまでに整理したそれらの情報の公開共有の準備を行う。
- ・ 学会賞選考委員会
- ・ 論文賞選考委員会
- ・ 大会発表賞選考委員会
- ・ ABS 問題対応委員会
- ・ 国際シンポジウム準備委員会
2020 年度に韓国で開催される予定だった国際シンポジウムが延期となり, 2021 年度に開催される予定である (日時・場所ともに未定)。開催の準備・実施に関して協力を進めるとともに, 会員に対して周知し参加を呼びかける。
- ・ 標本問題対応委員会
日本国内の博物館や植物園のワシントン条約特定科学施設への登録を推進するための情報提供を行うとともに, 経済産業省とも連携して普及に努める。一方, 最近, イネ科およびマメ科のハーバリウム標本が牧草とみなされて廃棄されるケースが発生していることから, 農林水産省植物防疫課とこの問題の解決に向けて協議を行う。
- ・ 研究・普及推進委員会
幹事会や他の委員会等と連携しながら, 植物分類学の研究の推進, 一般への普及, 地域植物研究会の問題・課題や連携に取り組んでゆく。

(4) 表彰

- ・ 日本植物分類学会賞 (学会賞・奨励賞) の授与を行う。
- ・ 日本植物分類学会論文賞の授与を行う。
- ・ 日本植物分類学会大会発表賞の授与を行う。

(5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・国内学会連合等への参加・連携を行う：日本学術会議，自然史学会連合，日本分類学会連合など。
- ・The Korean Society of Plant Taxonomists (KSPT)，および Taxonomy and Evolution Division, the Botanical Society of China (BSC) 等と連携し，韓国で開催予定の国際シンポジウムに若手研究者派遣を行う。

(6) その他

- ・学会刊行物のバックナンバー等の販売と整理を行う。
- ・当年度発行の『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』と『植物地理・分類研究』の論文 PDF を J-STAGE で公開する。
- ・J-STAGE のオンライン投稿・審査システム (Editorial manager) への使用申請を行う。
- ・植物分類学関連情報 (学術集会，研究動向，出版物，公募) を収集し，ニュースレター，ホームページ，メールニュース等で提供する。
- ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行う。

2021 年度予算案 → 19 ページに掲載

第 3 号議案 会員の権利と会費についての細則第 1 条の会則変更案

2020 年度第 1 回評議員会での議論に基づき，2021 年度総会において会員の権利と会費についての細則第 1 条を変更することを提案する。

旧	新
会員の権利と会費についての細則	会員の権利と会費についての細則
第 1 条 会員は，次に掲げる権利を有する。 … (省略)	第 1 条 会員は，次に掲げる権利を有する。 … (省略)
2 前項の規定にかかわらず，団体会員および賛助会員は (1) の権利のみを有する。	2 前項の規定にかかわらず，団体会員および賛助会員は (1) の権利のみを有する。
	3 <u>前項の規定にかかわらず，会費を滞納した場合は，未納の年度について会員の権利を行使することができない。</u>
	附則 <u>本会則は 2021 年 3 月 9 日より実施する。</u>

補足説明：会費未納会員への郵便物発送を停止することができるように変更するものです。

第 4 号議案 会則第 9 条の会則変更案

2020 年度第 1 回評議員会での議論に基づき，2021 年度総会において会則第 9 条を変更することを提案する。

旧	新
第 9 条 会員が退会しようとするときは，会長に届け出なければならない。この場合，会費の滞納があるときは，未納額を納めなければならない。	第 9 条 会員が退会しようとするときは，会長に届け出なければならない。 この場合，会費の滞納があるときは，未納額を納めなければならない。
	2 <u>1 年以上会費を滞納した者は，評議員会の議決を経て，会長が退会させることができる。</u>
	3 <u>前項の手続きを経て退会した会員が再入会する時は，再入会年度の会費に加えて，退会時点で未納であった会費を納入しなければならない。</u>
	附則 <u>本会則は 2021 年 3 月 9 日より実施する。</u>

補足説明： 会費未納会員（例えば、学会への貢献は大きいが高齢で意思疎通が困難な会員、長期に渡って連絡先が不明の会員）を退会させる選択肢が除名以外になく、結果として会計幹事の未納会費督促作業の負担が大きくなっている現状を踏まえ、変更を提案するものです。

2020 年度決算案

2020 年度 一般会計（2020.12.31 現在）

収入の部	単価	数	予算	決算	予算との差異	
会費						
通常（一般）	7,000	743	5,201,000	5,234,000	33,000	注 1
通常（学生 / 海外）	3,000	119	357,000	325,000	△ 32,000	注 1
団体会員	8,000	21	168,000	176,000	8,000	注 1
自動振替手数料	132	145	19,140	18,876	△ 264	注 2
APG カラーチャージ			350,000	522,000	172,000	
バックナンバー販売			120,000	155,250	35,250	
利息			50	65	15	
雑収入			50,000	154,101	104,101	注 3
合計			6,265,190	6,585,292	320,102	

支出の部

大会補助費			100,000	100,000	0	
講演会補助費			70,000	0	△ 70,000	
出版物印刷費						
APG vol.71 (1,2,3)	930,000	3	2,790,000	3,010,262	220,262	
植物地理・分類研究 vol.68 (1,2)	700,000	2	1,400,000	1,128,743	△ 271,257	
ニュースレター No.76-79	55,000	4	220,000	202,400	△ 17,600	
学会誌編集補助費			250,000	253,611	3,611	
英文校閲費			50,000	50,000	0	
出版物送料						
APG 送料	110,000	3	330,000	358,252	28,252	
和文誌送料	110,000	2	220,000	216,355	△ 3,645	
NL 送料	90,000	2	180,000	178,624	△ 1,376	注 4
会議費			0	0	0	
学会賞表彰経費			45,000	47,104	2,104	
自然史学会連合分担金			20,000	20,000	0	
分類学会連合分担金			10,000	10,000	0	
事務局管理費						
消耗品費			20,000	18,912	△ 1,088	
交通費			85,000	0	△ 85,000	
封筒等印刷費			0	9,723	9,723	注 5
通信費（小包手数料を含む）			50,000	60,545	10,545	
手数料・その他			15,000	12,000	△ 3,000	
集金代行基本料金 / 資金振込手数料			4,070	4,070	0	
集金代行振替手数料	132	148	19,536	19,008	△ 528	
レンタルサーバー使用料			29,700	26,400	△ 3,300	
国際シンポジウム積立金			200,000	200,000	0	
予備費			170,000	70,892	△ 99,108	注 6
合計			6,278,306	5,996,901	△ 281,405	

単年度収支	△ 13,116	588,391	601,507
前年度からの繰越金	5,706,920	5,706,920	0
次年度への繰越金	5,693,804	6,295,311	601,507

注 1: 会員数の変動があるため。

注 2: 会員数の変動と残高不足による未収分があるため。

注 3: NL 広告掲載料（20,000 円）および著作権使用料（134,101 円）。

注 4: 和文誌と同時発送を行ったため。 注 5: 幹事交代により差出人住所が変更されるため。

注 6: 選挙にかかる費用（50,182 円）、学会ウェブサイトの刷新に伴う費用（6,710 円）など。

2020年度 特別会計〔絶滅危惧種調査〕(2020.12.31現在)

収入の部	予算	決算	予算との差異
前年度繰越金	2,747,296	2,747,296	0
レッドリスト改訂のための解析委託費(2020年分)	3,600,000	3,600,000	0
合計	6,347,296	6,347,296	0

支出の部

事務経費(2019年分)	2,747,296	2,700,880	△46,416
レッドリスト改訂のための解析費(2020年分)	1,000,000	1,000,000	0
事務経費(2020年分)	600,000	600,440	440
次年度への繰越金	2,000,000	2,045,976	45,976
合計	6,347,296	6,347,296	0

注1:2019年度(環境省の会計年度;2019年4月1日~2020年3月31日)委託費。

注2:環境省の会計年度内(2020年3月31日まで)に支出した、レッドリスト改訂のための調査解析にかかる事務経費。

注3:環境省の会計年度内(2020年4月1日から)に支出した、レッドリスト改訂のための解析費。

注4:環境省の会計年度内(2020年4月1日から)に支出した、レッドリスト改訂のための調査解析にかかる事務経費。

注5:環境省の会計年度内(2021年3月31日まで)に支出予定。

2020年度 特別会計〔国際シンポジウム〕(2020.12.31現在)

収入の部	予算	決算	予算との差異
前年度繰越金	400,000	400,000	0
国際シンポジウム積立金	200,000	200,000	0
合計	600,000	600,000	0

支出の部

国際シンポジウム準備金	0	0	0
国際シンポジウム若手派遣	100,000	0	△100,000
次年度への繰越金	500,000	600,000	100,000
合計	600,000	600,000	0

注1:2022年の開催に備えての積立金。一般会計より移管。

注2:日本でのシンポジウムの開催がないため。

注3:前年度開催予定だった韓国・済州島でのシンポジウムが今年度以降に延期されたため。

2020年度 特別会計〔命名規約〕(2020.12.31現在)

収入の部	予算	決算	予算との差異
前年度繰越金	617,609	617,609	0
合計	617,609	617,609	0

支出の部

	予算	決算	予算との差異
次年度への繰越金	617,609	617,609	0
合計	617,609	617,609	0

注1:該当する支出がなかったため。

2020年度 特別会計〔顕彰事業〕(2020.12.31現在)

収入の部	予算	決算	予算との差異
前年度繰越金	385,924	385,924	0
一般会計より移管	0	0	0
合計	385,924	385,924	0

支出の部

	予算	決算	予算との差異
次年度への繰越金	385,924	385,924	0
合計	385,924	385,924	0

注1:該当する支出がなかったため。

2021 年度予算案

2021 年度 一般会計 (2021.1.4 現在)

収入の部	単価	数	予算	前年度予算との差異	
会費					
通常 (一般)	7,000	739	5,173,000	△ 28,000	注 1
通常 (学生 / 海外)	3,000	124	372,000	15,000	注 1
団体会員	8,000	21	168,000	0	注 1
自動振替手数料	132	143	18,876	△ 264	注 2
APG カラーチャージ	18,000	18	324,000	△ 26,000	注 3
バックナンバー販売			120,000	0	注 3
著作権使用料			100,000	100,000	注 4
利息			50	0	注 3
雑収入			0	△ 50,000	注 4
合計			6,275,926	10,736	

支出の部

大会補助費			100,000	0	注 5
講演会補助費			70,000	0	
出版物印刷費					
APG vol.72 (1,2,3)	930,000	3	2,790,000	0	
植物地理・分類研究 vol.69 (1,2)	700,000	2	1,400,000	0	
ニュースレター No.80-83	55,000	4	220,000	0	
学会誌編集補助費			250,000	0	
英文校閲費			50,000	0	
出版物送料					注 6
APG 送料	110,000	3	330,000	0	
和文誌送料	110,000	2	220,000	0	
NL 送料	90,000	2	180,000	0	注 7
会議費			0	0	注 8
学会賞表彰経費			47,000	2,000	注 3
自然史学会連合負担金			20,000	0	
分類学会連合負担金			10,000	0	
事務局管理費					
消耗品費			20,000	0	
交通費			50,000	△ 35,000	注 9
封筒等印刷費			0	0	
通信費 (小包手数料を含む)			50,000	0	
手数料・その他			15,000	0	
集金代行基本料金 / 資金振込手数料			4,070	0	
集金代行振替手数料	132	143	18,876	△ 660	注 2
レンタルサーバー使用料			26,400	△ 3,300	注 10
国際シンポジウム積立金			200,000	0	注 11
予備費			100,000	△ 70,000	注 12
合計			6,171,346	△ 106,960	

単年度収支	104,580	117,696
前年度からの繰越金	6,295,311	588,391
次年度への繰越金	6,399,891	706,087

注 1: 会員数見直しによる。

注 2: 登録会員数の変更のため。

注 3: 前年の実績に基づき更新。

注 4: 著作権使用料と雑収入を分離したため。

注 5: オンラインで実施

注 6: 前年の実績に基づき更新。

注 7: 学会誌との同時発送を年 2 回行う。

注 8: 幹事の引継ぎがないため。

注 9: 幹事の引継ぎおよび選挙がないため。

注 10: 初期費用が不要となるため。

注 11: 2022 年の開催および若手派遣に備えての積立金。特別会計へ移管。

注 12: 前年度は選挙にかかる費用と封筒の修正費用を追加で計上したため。

2021年度 特別会計〔絶滅危惧種調査〕(2021.1.4現在)

収入の部	予算	前年度予算との差異	
前年度繰越金	2,045,976	△ 701,320	注 1
レッドリスト改訂のための解析委託費(2021年分)	3,600,000	0	注 2
合計	5,645,976	△ 701,320	

支出の部

レッドリスト改訂のための事務委託費・解析費(2020年分)	2,045,976	△ 701,320	注 3
レッドリスト改訂のための事務委託費・解析費(2021年分)	2,000,000	400,000	注 4
次年度への繰越金(2021年分)	1,600,000	△ 400,000	注 5
合計	5,645,976	△ 701,320	

注 1:2020年度(環境省の会計年度;2020年4月1日~2021年3月31日)委託費による繰越金。

注 2:2021年度(環境省の会計年度;2021年4月1日~2022年3月31日)委託費。

注 3:環境省の会計年度内(2021年3月31日まで)に支出予定。

注 4:環境省の会計年度内(2021年4月1日から)に支出予定。

注 5:環境省の会計年度内(2022年3月31日まで)に支出予定。

2020年度 特別会計〔国際シンポジウム〕(2021.1.4現在)

収入の部	予算	前年度予算との差異	
前年度繰越金	600,000	200,000	
国際シンポジウム積立金	200,000	0	注 1
合計	800,000	200,000	

支出の部

支出の部	予算	前年度予算との差異	
国際シンポジウム準備金	0	0	注 2
国際シンポジウム若手派遣	100,000	0	注 3
次年度への繰越金	700,000	200,000	
合計	800,000	200,000	

注 1:2022年の開催および若手派遣に備えての積立金。一般会計より移管。

注 2:日本でのシンポジウムの開催がないため。

注 3:前年度開催予定だった韓国・濟州島でのシンポジウムが今年度以降に延期されたため。

2021年度 特別会計〔命名規約〕(2021.1.4現在)

収入の部	予算	前年度予算との差異	
前年度繰越金	617,609	0	
合計	617,609	0	

支出の部

次年度への繰越金	617,609	0	注 1
合計	617,609	0	

注 1:該当する支出がないため。

2021年度 特別会計〔命名規約〕(2021.1.4現在)

収入の部	予算	前年度予算との差異	
前年度繰越金	385,924	0	
合計	385,924	0	

支出の部

次年度への繰越金	385,924	0	注 1
合計	385,924	0	

注 1:該当する支出がないため。

東京大学植物標本室（総合研究博物館分室）再開のご連絡

東京大学総合研究博物館 池田 博・清水 晶子

一昨年より、東京大学植物標本室 (TI)・総合研究博物館分室（単子葉類・双子葉離弁花類）を、耐震工事のために一時閉室させておりましたが、ようやく標本も戻り、標本の閲覧ができる状態になりましたのでお知らせします。一年半近く不便をおかけしましたが、これで小石川植物園分室（シダ植物、裸子植物、双子葉合弁花類）とともに、TI 収蔵の標本全てを閲覧することができるようになりました。

TI の植物標本の閲覧を希望される方は、以下まで連絡下さるようお願い致します。

連絡先 (TI 共通アドレス) : ti_herbarium@ns.bg.s.u-tokyo.ac.jp

なお、コロナウィルスの感染状況によっては、大学全体の活動が制限され、TI も閲覧をお断りする場合があります。詳しい開室状況については、TI ホームページ <http://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DShokubu/TI/jp/index.php> でお知らせしますので、事前にチェックをお願い致します。

植物関連雑誌のタイトル紹介

和文誌編集委員 中田 政司

○南紀生物

南紀生物同好会会誌編集部

<http://nankiseibutu.jp/mokuji.html>

第 61 巻第 1 号 2019 年 6 月—山本好和・井内由美・平山吉澄：兵庫県産の興味ある地衣類 I / 山本好和・土永浩史：奈良県上北山村大台ヶ原の地衣類 / 山本好和・岡田慶範・上杉 毅：愛知県新城市鳳来寺山の地衣類

第 61 巻第 2 号 2019 年 12 月—山本好和・盛口 満・佐藤寛之 杉本雅志・杉本まゆみ・多和田 匡：沖縄県国頭村安波の地衣類 / 清水善吉・梅村有美・山本和彦：熊野灘島嶼の哺乳類，爬虫類，両生類および植生概要 / 山本好和・高萩敏和・坂東 誠・河合正人：京都府産の興味ある地衣類 IV / 山本好和・草間裕子：新潟県長岡市寺泊の地衣類

第 62 巻第 1 号 2020 年 6 月—原口展子・原口昌巳：宍道湖玉湯地区で採集したオオササエビモ *Potamogeton* × *anguillanus* M-hybrid / 小峰正史・原 光二郎・川上寛子・山本好和：秋田県産の興味ある地衣類 I / 土永浩史・山本誠二：紀伊半島産の興味ある蘚苔類 VI / 山本好和・上杉 毅・石原 峻：愛知県瀬戸市岩屋堂の地衣類 / 山本和彦：紀伊半島におけるシマエンジュの新たな産地 / 山本好和・盛口 満：沖縄県宮古島市の地衣類

○くろしお

南紀生物同好会会報編集部

http://nankiseibutu.jp/mokuji_kuroshio.html

No.37 2018 年 12 月—北野一夫：和歌山県における移入植物調査 II / 北野一夫：和歌山県田辺市本宮町の大斎原のコウヨウザン (スギ科) の巨木 / 北野一夫：和歌山県におけるコガマ (ガマ科) の分布 / 北野一夫：和歌山県高野町で採集したマツカサススキ

No.38 2019 年 10 月—北野一夫：和歌山県のため池における水草調査 (2013.1 ~ 2018.11) / 北野一夫：和歌山県における移入植物調査 III 2000 ~ 2016 / 岡本大希・山本佳範：和歌山県で採集されたキバナノショウキラン / 北野一夫：和歌山県みなべ町東本庄のハマセンダン (ミカン科) / 北野一

- 夫：明神山と植物／北野一夫：有田川町栗生まで北上したナチシダ（イノモトソウ科）／久保田 信・内藤麻子：和歌山県白浜町に所在する立ヶ谷干潟付近に生育する巨大なオオバコ的一种／久保田 信：和歌山県田辺市に所在する公園から消滅したコモウセンゴケ（モウセンゴケ科）／北野一夫：九度山町東郷のミズニラ（ミズニラ科）
- No.39 2020年9月—北野一夫：和歌山県における野草採集記録（2008.9～2019.12）／北野一夫：太田岳と植物／北野一夫：古座川町洞尾のメタセコイヤの巨木／北野一夫：和歌山県有田地方のセキショウモ／北野一夫：北山村下尾井のヒメユズリハの巨木と周辺植物／北野一夫：和歌山県におけるカンコノキ（トウダイグサ科）の分布／楠部紅鯨・石原希美・伊山太智：和歌山県日高地方における2018年台風21号と桜の狂い咲き

○大阪市立自然史博物館研究報告

〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園1-23 大阪市立自然史博物館

<http://www.mus-nh.city.osaka.jp/publication/bulletin/>

（大阪市立自然史博物館リポジトリサービス：pdf ファイル閲覧可能）

- 73号 2019年3月—古本 良・大谷雅人・指村奈穂子・澤田佳宏・横川昌史：希少海岸植物バシクルモンの新潟県の1生息地における開花状況及び地下部の観察結果／鳴橋直弘・久米 修：バラ科キイチゴ属ゴシヨモミジイチゴの新産地とその果実／末次健司・福永裕一：ムロトムヨウラン（ラン科）を鹿児島県の黒島、中之島および奄美大島から記録する／山本好和・高萩敏和・坂東 誠・河合正人：大阪府地衣類資料Ⅲ．箕面公園（箕面市）の地衣類相および興味深い2種について
- 74号 2020年3月—鳴橋直弘：アジア産キイチゴ属の分類学的ノート（9）4分類群に関する学名の整理／稗田真也・植村修二・野間直彦：アメリカミズキンバイとよばれる *Ludwigia decurrens* と *L.longifolia*（アカバナ科）の推奨される和名／横川 昌史・高田みちよ・長谷川 匡弘：大阪府における特定外来生物 オオバナミズキンバイ（広義）（アカバナ科）の現状

名誉会員推薦のお願い

庶務幹事 西野貴子

名誉会員については、会則第5条「本会（旧日本植物分類学会ならびに旧植物分類地理学会を含む）に50年以上在籍した通常会員、または植物分類学の発展に著しい功績のあった個人で、評議員会の議を経て会長が推薦するもの」と定められています。しかし、一昨年の推薦をもって会員の在籍期間を確認するための資料が途切れたため、昨年度の総会にて自薦、他薦は問わず、情報を広く募集することに決まりました。

そこで来年度の推薦に向けて、会員の皆さまからの情報をお待ちしております。不確かでも結構ですので、お心当たりがありましたら、庶務幹事までメール、ファックス、郵送にてぜひご連絡ください。

庶務幹事連絡先 西野貴子

jimu@e-jsps.com Fax: 072-254-9754

〒599-8531 堺市中区学園町1-1 C10 棟 大阪府立大学 大学院理学系研究科

書評

土佐の植物暦

小林史郎 / 著 高知新聞総合印刷 / 発行 ISBN : 978-4-910284-00-2
 定価 : 本体 1,800 円 + 税 A5 版 219 ページ 2020 年 9 月 10 日

加藤 雅啓 (国立科学博物館植物研究部)

土佐とは言うまでもなく、坂本龍馬や牧野富太郎が生まれ、皿鉢料理の主役であるかつおでも有名な南国高知県である。高知県植物誌は出版されて 10 年余りになるが、牧野植物園にいた小林氏が中心メンバーとなって「市民参加型」の植物誌としてできたものとよく言われる。小林氏が綴った「土佐の植物日誌」は地元の高知新聞に一人気が高かったのであろう—2008 年から 11 年の長きにわたって連載された。本著は連載記事をもとにして出来上がったのであり、本著を手掛けた出版社もそのつながりにある。コロナ禍を押し、本著を出版した著者・出版社の熱意は大したものである。

本著には、高知県の在来植物が 2 月から翌年 1 月までの月ごとに分けてまとめられている。各植物は和名、学名、科名と生活形、分布に続いて、特徴を簡潔にまとめた文章、それに写真が載っている。このように書くと、普通のガイドブックと変わりがないように見えるが、文章に他にはない特徴がある。各種の説明には、植物の特徴のほか、そこを訪れる昆虫などの動物のこと、食べられるかどうか、名前の由来、などが加えられている。ここが本著のミソといえる。この辺りを読むと植物の生きざまがわかって、楽しくなってくる。小林氏は学生時代から、花と昆虫にかかわりを研究したり、長期にわたって琉球で調査したり「分類学」の枠にこだわらないはみ出し野郎のスタイルを通して。自然誌あるいはナチュラルヒストリーを自認する著者の面目躍如たるところである。あとがきで、著者は読者に「身近な植物の暮らしに目をとめてみてください」と望んでいるが、市民の皆さんばかりでなく、分類学の専門家にもその気持ちは十分伝わるであろう。

本著は内容ばかりでなく体裁も好感もてる。手に取ってみると、温かみを感じる。冒頭や巻末に手書きの図や植物画がちりばめられているのもそうさせるのだろう。ちなみに、「植物の生育環境」で石灰岩地や蛇紋岩地が載せられているのは、かつて土壌固有植物に興味を持った評者には個人的に注意をひかれる。また、「植物の形」でつりがね形の花冠を最初に描いているが、博士時代に研究した花がこの形で、訪花する昆虫がそれに対応することを示した著者のこだわりが感じられる。

本書は屋外に簡単に持ち運べるサイズなので、植物を見つけては名前を調べたり解説を見たりできる。しかも、月ごとの配列なのでその時々を使いやすい。余談だが、著者とは以前同じ研究室にいたので、親しみと敬意を込めて君づけで呼びたいところであるが、書評も公の文書なので大勢に従った。昔の仲間の出版をこうして書評できるのはうれしいものである。



